

グローバル資源配当の政治哲学的研究

才野 英里子

キーワード： グローバルな正義、分配的正義、天然資源、課税、運の平等主義、十分主義

1. 研究の背景と目的

政治哲学におけるグローバルな正義の研究は、国境を越える正義を主題とする研究であり、途上国での貧困問題や気候変動の問題に適用されてきた。トマス・ポグゲは、われわれ先進国市民は自国政府の政策や国際的な政治経済秩序を通じて貧困層への加害を行っていると主張した上で、その補償としてグローバル資源配当という分配制度を提案している。この制度提案に対して様々な検討がなされてきたが、いかなる規範理論に基づいて分配を行うべきかという点に関する先行研究はごくわずかである。本研究の目的は、1) 分配的正義論において有力な理論である運の平等主義および十分主義を、グローバル資源配当という制度に適用した上で、各説の妥当性を検討し、2) 十分主義に基づくグローバル資源配当の提案をすることである。

2. グローバル資源配当の概要

グローバル資源配当とは、各国家の持つ天然資源の無条件の所有権を修正して、天然資源の利用から大いに受益している富裕国の人々にその利用料を課し、天然資源の利用から不当に排除されている貧困層へその補償を行うという制度である。各国内で単一の資源の採掘に応じた課税が行われ、その多くは最終消費者へ転嫁される。そのため、資源を多く使用している富裕国の市民が主に負担することになる。各国家によって取りまとめられた配当は、特定の貧困国に対して提供される。対象となる天然資源は、その消費の抑制が環境保全に資する資源とし、貧困削減と環境保全の双方を実現する制度として提案されている。

3. 運の平等主義・十分主義の適用および検討

今日の分配的正義論において有力な学説の1つである運の平等主義は、個人の選択と状況を区別した上で、個人が自主的な選択の結果としての不平等は個人の責任とみなされ補償対象から除外される一方で、個人の操作不可能な状況の結果としての不平等は補償対象として含められるとする。第4章では、この理論をグローバル資源配当に適用し検討を行う。運の平等主義は、選択の結果であればいかに過酷な貧困状態にあっても放置することが正当化されるという過酷さの異議にさらされる。また、選択を含むすべての事象は因果律の下にあるという決定論を否定できないため、選択と状況の区別は困難であるという問題も抱えている。運の平等主義は理論自体として問題点を孕んでいると論じた。

運の平等主義の難点を回避できる理論として、第5章では十分主義に焦点をあてる。十分主義とは、分配的正義において、万人に十分な閾値までを保障するが、閾値を超えた領域では再分配を行わないとする立場である。各論点について検討を行い、グローバル資源配当の分配原理に適用した場合の帰結を検討し、それが妥当であることを論証する。

4. 結論

分配原理としての運の平等主義は、過酷さの異議や選択と状況の区別の困難性から、理論自体として問題を孕んでおり、それをグローバル資源配当に適用するのは望ましくないことが明らかとなった。十分主義は、運の平等主義が持つ問題点を回避することができ、グローバル資源配当の分配原理として妥当である。そこで、ポグゲの見解と対比しつつ、十分主義に基づいたグローバル資源配当を提案した。